カナダ人物記⑯

世界十指に入る クラシック・ギタリスト

リオナ・ボイド

一九八〇年三月、カナダの女性ギタリスト、リオナ・ボイドが初めて日本公演を行なったとき、朝日新聞は彼女の演奏をこう表現した――美しく変幻きわまりない演奏、聴衆を酔わせる見事な公演だ、と。

リオナの演奏は、素晴らしい音楽的感性、高い完成度、そして何よりも完ぺきな技法で知られている。その華麗で危げない演奏は、各国のVIPに愛され、エリザベス女王、トルドー首相(当時)、メキシコ大統領、シュミット西独首相(当時)、カーター米大統領(当時)らが彼女を招いて演奏に耳を傾けている。三年前のオタワ・サミットのレセプションでも演奏した。

しかし、リオナの聴衆はVIPや専門家だけではない。圧倒的多数の民衆が彼女のコンサートに集まっている。リオナ自身、地方の小さな演奏会が好きで、どんな草深い田舎にも出かけていく。カナダやアメリカにとどまらない。これまでに、ヨーロッパ、日本、カリブ海諸国、メキシコ、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランドなどでも多くの聴衆を魅了してきた。

見知らぬ地域でのコンサートでは、思いもかけない経験に出会う。熱帯の湿気でギターのネックは歪むし、極地の寒気でニスがひび割れることもあった。野外コンサートでは蚊の大群に悩まされた。サンサルバドルでは演奏の真最中に停電になり、真暗闇の中で弾き続けたし、インディアナポリスの野外コンサートでは、小鳥や猫やこうもりの鳴き声と張り合わなければならなかった。

リオナの公演ツアーにはこうした逸話がたくさんある。そのこと自体、彼女が世界中の人々との出会いを自ら求めて楽しんできた証拠である。リオナは、自分の芸域とファン層を広げるため、旅を好んだのだが、遠い国への旅のほかにも、違う芸域の人との共演を意欲的に行なってきた。とくにカナダのフォーク・ロック界のスーパースター、ゴードン・ライトフットとの共演ツアーは、それまで比較的少人数だった公演スタイルから、一気に五千人相手に演奏する醍醐味を教えてくれた。

リオナ・ボイド

カントリー・スターのチェット・アトキンスとバッハのブランデンブルグ協奏曲やポピュラーソングをレコーディングし、あるいはアンドルー・デービス指揮イギリス室内楽団とレコーディングしたのも、常に新しいものに挑戦し、芸域とファン層の拡大を図りたいという意図からだった。

だが、こうした世界ツアーは、もうあまりないかもしれない。「今後の人生を旅の途中で終わりたくないという気はあります。私は、セゴビアのような、八十五歳の身で世界を回れるギタリストではないんです」。とリオナは語る。

彼女は十月に、三度目の日本ツアーをする。十月十三日の福岡を皮切りに、大阪、東京、神奈川、長野、名古屋、札幌、仙台での公演が待っている。

リオナ・ボイド。三十一歳、英国ロンドン生まれ。一九五七年カナダ移住。トロント大学音楽学部卒。トロントのロイヤル・コンサーバトリー・オブ・ミュージックでエリ・カスナーにクラシック・ギターを学ぶ。ジュリアン・ブリーム、イエペス、セゴビア、ラゴヤ、ディアスなど世界のトップ・ギタリストにそれぞれ師事。コンサートのかたわら、カナダ、アメリカのテレビに多数出演。「リオナ・ボイドとイギリス室内楽団」、「ザ・ファースト・ナッシュビル・ギター・カルテット」などLPレコード五枚。一九七八年ジュノー賞(カナダのレコード大賞)、七九年バニア賞を受賞。

編集後記

●ターナー政府が生まれて二か月半で、保守党のマルルーニー政権が出現しました。全国すべての州および準州で過半数を占め、カナダ政治史上空前の議席を獲得するという勝ちっぷりでした。

●新政権は失業など経済問題への対処と、対米関係の改善を最大目標に掲げています。しかし、そのために対日関係がおろそかになるという懸念はなさそうです。もともと保守党は日本と特に関係の緊密な西部カナダを地盤にしており、日本への関心の強さは決して自由党に劣りません。今回の選挙でも、同地域で圧倒的な勝利を収めています。

●久々の保守党政権。四十五歳のフレッシュなリーダー。全国を制覇した圧倒的な強さ。マルルーニー政権はどういう政策を打ち出してくるでしょうか。

●ところで新首相の呼び方ですが、アイルランド系のため、Mulroneyと書いてマルルーニーと発音するのだそうです。本紙ではこれまでマルローニと書いていましたが、訂正します。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式分書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部